

日本語指導における教材提示の問題 「～んです」をめぐる

山本優子

教養・言語センター

(2002年9月12日受理)

One Problem in Presenting Materials in Japanese Language Teaching Concerning 「～んです」

Center for Languages and General Education,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

YAMAMOTO Yuko

(Received September 12, 2002)

I はじめに

岐阜女子大学における留学生対象の日本語授業に「総合」という科目がある。そこで使用される教科書は、どちらかといえば「話す」、「聞く」を中心に構成されている。その「話しことば」を中心に日本語の基礎的文法事項を習得させ、それを追っていくかのような形で「読む」、「書く」が付いてくる。

「話しことば」と「書きことば」の基本的な違いは、「話しことば」においてはその表現にかなりの不完全さが許容されるが、一方「書きことば」では原則として完全な表現、文章が要求されることにある。しかし、「話しことば」にもいろいろな型があり、(1)おしゃべり、(2)相談、報告、謝罪、伝達などの小さなコミュニケーション、(3)講演、講義、会議での発言、(4)スピーチ、というように分類することができる。これらすべての場合において、不完全な表現が許容されるわけではないが、日本語初級の段階での「話しことば」といわれる(1)、(2)においては不完全性、冗長性がかなり高い。だから適当に使えればよいというのでは、日本語学習を段階的に考えての基礎学習としては不適當であろう。

ここでは、「話しことば」の中でも、学習者が長時間学習した後でも容易に会話に取り入れられないものの一つである「～んです」について、それが正しく使えるようになるための指導法の一環として、使用教科書である『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』をとおして、その導入時期、導入方法を考えたい。

II 「～んです」の意味・用法

「～んです」は、

- (1 a) アメリカにはいつ行くのですか。
(1 b) アメリカにはいつ行くんですか。

- (2 a) A: どうして学校を休んだのですか。
B: 頭が痛かったの(です) / 頭が痛かったからです。
(2 b) A: どうして学校を休んだんですか。
B: 頭が痛かったんです。

というように、(1 a)の「の」が音韻的に短縮されたもの、(2 a)の「どうして」を使った質問文の答「～からです」の代わりに使われる。

(1 a)の場合、この形式名詞の「の」は「こと」とほぼ同様の機能を持っている。「の」あるいは「こと」しか使えない構文の主要なものについてはここでは触れない。

- (3 a) バラを育てるのは難しい。
(3 b) バラを育てることは難しい。

(3 a)と(3 b)はいずれも適切な文で、このどちらを使っても間違いではない。日本語話者はこれらの文をうまく使い分ける。これは、会話における話し手の「ウチ」と「ソト」の意識からくるものであり、「の」は柔らかいイメージ、話し手と話題の親近感を、「こと」は硬いイメージ、話し手と話題の距離を感じさせるのである。つまり、「の」が個人の経験からのように聞こえ、「こと」が一般論のように聞こえるのも「の」が持つ性質のひとつなのである。したがって、この「の」が持つ性質は「の」音韻的に短縮された「～んです」にもあり、

- (4) A: どこへ行くんですか。
B: 友だちの家へ行くんです。

が「どこへ行きますか」「友だちの家へ行きます」となると「～さんは、これからどこへ行きますか。」といったクイズの質問とその答のようになり、ある事実や状況といった前提の関連性を想像せず、会話としては不自然さを残す。

また、(2 a)、(2 b)の「～からです」と「～んです」においても、答えが(2 b)の「頭が痛かったんです」と(2 a)の「頭が痛かったからです」では前者のほうが、より聞き手を自分の側に引き込もうとする感情が働いており、距離を感じさせない。

結局「～んです」の用法は、ある事実や状況の背後にある事情、原因、理由などを相手に確かめたり、問いただしたりする場合、話し手が自分の発言に関して事情を説明したり、付け加えたりする場合、状況を説明した後で助言や指示を求める場合に用いられると云えよう。

Ⅲ 教科書『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』における「～んです」の導入と展開およびその問題点

「～んです」の導入は26課(『みんなの日本語初級Ⅱ』)でなされ、次のような導入、展開で行われる。

1 目前の事実や状況の背後にある事情、原因、理由などを相手に確かめたり、問いただしたりする場合

(5) 渡辺さんは時々大阪弁を使いますね。大阪に住んでいたんですか。

(6) おもしろいデザインの靴ですね。どこで買ったんですか。

(7) A: どうして遅れたんですか。

B: バスが来なかったんです。

2 話し手が自分の発言に関して事情を説明したり、付け加えたりする場合

(8) A: 運動会に参加しますか。

B: いいえ、参加しません。スポーツはあまり好きじゃないんです。

さらに、展開のかたちで

3 疑問詞と一緒に使って、具体的な情報を得たい場合

(9) A: すてきなカバンですね。どこで買ったんですか。

B: デパートで買いました。

A: そうですか。いつ買ったんですか。

B: 先週買いました。

(この段階で、教科書は答えに「～んです」を使わないで答えさせる。)

4 どうして～んですか /～んです

(10) A: 毎朝新聞を読みますか。

B: いいえ、読みません。

A: どうして読まないんですか。

B: 時間がないんです。

5 ～んですが、～していただけませんか

(11) 生け花を習いたいんですが、先生を紹介していただけませんか。

6 状況を説明した後で、助言や支持を求める場合

(12) 金閣寺へ行きたいんですが、どのバスに乗ったらいいですか。

以上の用法は、前提となる場面を設定した上で導入、その後パターン・プラクティス、会話練習といった順序で学習を進める。しかし、次のような形式のテストを学習者に行ってみると、「～んです」の用法があることさえ忘れてしまっているのである。

Bさんは大きいカバンを持っています。AさんはBさんの大きいカバンを見て、
思いました。たぶんBさんは旅行に行きます。AさんはBさんに確かめます。

A：Bさん旅行に_____。

B：ええ。

A：いいですね。_____。

B：ハワイに_____。

解答で一番多いのは、

A：Bさん旅行に行きますか。

B：ええ。

A：いいですね。どこへ行きますか。

B：ハワイに行きます。

というものである。ここで、何故このような解答しかできないのかを考えると、おそらくこの場面設定（前提条件）と「～んです」が結びついていないのと同時に、「ます形」をあまりに使いすぎて他の用法が使えないのではないかという疑問を持つ。実際、教科書の初期の導入事項をみていくと、会話としては「～んです(か)」の方が自然な形であるにもかかわらず、「ます(か)」が使われている場合がみられる。

たとえば、第5課では

(13) わたしはあした京都へ行きます。

(14) あした会社へ行きますか。

(15) A：あした銀行へ行きますか。

B：いいえ、行きません。

A：あした郵便局へいきますか。

B：いいえ、行きません。

A：あしたどこへ行きますか。

(16) A : あしたどこへ行きますか。

B : どこ(へ)も行きません。

というように疑問詞で問われるものすべてを否定したいとき、否定形とともに助詞「も」を用いることの導入が、(13)(16)の流れに沿って導入、展開されているが、(15)、(16)の「も」を導入するために作られた展開文には不自然さが残る。

(15)、(16)の会話の不自然さは、やはり前提条件の有無に関係する。ただ単純にある場所へ行くか、行かないかを尋ねる場合と、どこかへ行くのではないかと思わせる状況が背景にある場合では、その違いを表す必要がある。

例えば

(17)きのう、どこへ行きましたか。

(18)きのう、どこかへ行きましたか。

この2つの文の違いは(17)は前提条件として、きのうどこかへ出かけていったのを見みた、または聞いたという条件が必要となる。一方(18)では、「か」を用いることによって、どこかへ行ったとかどこへも行かなかったという情報は必要ない。しかし、(17)に前提条件がある場合、文としては成り立たないことになり、当然「きのう、どこへ行ったのですか。 / きのう、どこへ行ったんですか。」が正しい文ということになる。

つまり、(15)においては、「あした、どこへ行きますか。」という文は、会話の流れからして「あした、どこへも行かないんですか」が、(16)では「あした、どこかへ行きますか」が自然であるといえる。

また、11課では

(19) A : 田中さんはどのくらいスペイン語を勉強しましたか。

田中 : 3か月勉強しました。

A : えっ、3か月だけですか。上手ですね。

とあるが、このAと田中さんの関係がどの程度のものであるかによって「田中さんはどのくらいスペイン語を勉強しましたか」の文は違ってくる。もちろん上の文は不自然である。Aと田中さんがあまり親しくない場合の会話であれば、「田中さんはどのくらいスペイン語を勉強されましたか」、田中さんが話すスペイン語を聞いてあまりに上手であるため、どれくらいスペイン語を勉強したのか尋ねたくなったのであれば、前提条件が整っているわけであるから「田中さんはどのくらいスペイン語を勉強したんですか」が自然である。

このように、不自然である会話を例文やパターンプラクティスで使うことは、日本語学習者にとってマイナスではないだろうか。文の不自然さは日本語話者だからこそ不自然と感ずるのであって、学習者は不自然な文を自然な文として受け取ってしまう危険性があるのではないか。一般にネイティブ・スピーカーがもつ言語感(Competence)をどのような形で言語の学習者に

伝えるかという問題は避けて通れない大切なことであろう。

さて、「～んです」の導入が遅い理由の一つとして、動詞の「辞書形」の導入が遅いことがあげられると思う。「～んです」がつく動詞は多くが「辞書形」であるため、この「辞書形」が導入されなければ必然的に「～んです」は導入されないのではないか。

Ⅳ 動詞の「ます形(連用形)」「辞書形(終止形)」の導入について

では、どうして動詞の「辞書形」の導入が遅いのか。これについて、『みんなの日本語初級』では、「です、ます」の「丁寧体」の運用能力がついた時点で「普通体(辞書形を含む)」を扱うと明記してある。したがって、「動詞」の語彙の導入は、20課で「行く(辞書形)、行かない、行った、行かなかった」という「普通体」が用いられるまで、基本的には「行きます、行きません、行きました、行きませんでした」という「です・ます形」が使われる。確かに形容詞、名詞、形容動詞の辞書形は「です・ます形」の形と似ているため、活用の導入は次の表で見る限り比較的簡単であり、それらに比べれば動詞は複雑である。

		肯 定	否 定
動 詞	現在(普通)	書く	書かない
	(丁寧)	書きます	書きません
	過去(普通)	書いた	書かなかった
	(丁寧)	書きました	書きませんでした
形 容 詞	現在(普通)	高い	高くない
	(丁寧)	高いです	高くないです/高くありません
	過去(普通)	高かった	高くなかった
	(丁寧)	高かったです	高くなかったです/高くありませんでした
名 詞	現在(普通)	学生だ	学生じゃない
	(丁寧)	学生です	学生じゃないです/学生じゃありません
	過去(普通)	学生だった	学生じゃなかった
	(丁寧)	学生でした	学生じゃなかったです/学生じゃありませんでした
形 容 動 詞	現在(普通)	静かだ	静かじゃない
	(丁寧)	静かでした	静かじゃないです/静かじゃありません
	過去(普通)	静かだった	静かじゃなかった
	(丁寧)	静かでした	静かじゃなかったです/静かじゃありませんでした

また、

1 現在の習慣的事柄・真理

- ・わたしは バスで 学校に 行きます。
- ・わたしは 朝 6時に 起きます。
- ・わたしは たばこを 吸います。
- ・わたしは テニスを します。

2 未来に行く(起きる)事柄

- ・わたしは 東京に 行きます。
- ・わたしは 結婚します。
- ・お風呂に 入ります。

といったことを述べる場合、「です・ます体」というのは「丁寧体」であり、敬語・謙譲語を学習していない初級レベルの学習者にとっては、日常会話で聞き手に不快感を与えることなく使用できるという利点もあり、会話を中心とした学習の場合、とても便利な形であると言えないこともない。

従って、5課終了時には「ます形」を軸としてその否定の形である「～ません」、それらが持つ役割、「去年、今年、来年、きのう、きょう、あした、ゆうべ、今朝」と言った「時」の導入に加えて過去を表す「た形」といったことを習得する。

さらに、6課では「ます形」に「～ませんか」、「～ましょう」の後続句をつけた文型を学習、これによって学習者は、簡単な日常の基本行動を表現できるようになる。

しかし、このような「ます形」を軸とした学習の仕方には、先に示したような問題点もある。

V 「～んです」および動詞の「辞書形」の導入時期と導入方法

「～んです」の導入時期が遅いために起こる日本語学習者の誤用については、『日本語教科書の落とし穴』(新屋栄子他 著, 1999)では「導入時期が遅いことを指摘し、前提との関連を意識した練習が大切であり、発話の際に目に見える事態を前提にした場合を中心にするとうわかりやすい」とあり、また、『日本語文法 学習者によくわかる教え方』(藤田直也 著, 2000)では『どうして』で始まる疑問文の演習パターンを繰り返すことで『～んです』の概念を学ばせる」といったことが書かれている。

まず、導入時期についてであるが、教科書に不自然な文が書かれている箇所(『みんなの日本語初級』でいえば5課)からでいいのではないかと。確かに日本語学習を始めて20時間程度(岐阜女子大学の日本語授業でいえば10時間程度)の学習者に、前提条件の説明は理解できないであろう。しかし、日本で日本語を学ぶ学習者にとってこの「～んです」は耳新しいものではない。教室外の日本人の日常会話の中では頻りに用いられる用法である。したがって、この用法を教科書の中で目にするに不自然さはないであろう。逆に学習者が「何故、この場合の用法が違うのか」という疑問を感じたとすれば、それは学習者を混乱に陥れるというマイナス面よりは、「～んです」の用法になにかしら意味があるのだと考えさせるプラス面の効果が大いのではないだろうか。

しかし、日本語学習者が自国で日本語を学習する場合、おそらく「～んです」は教科書で学

習するまで耳にすることはないだろう。それは、日本語教師がたとえ日本人でも同じであろう。なぜなら、多くの日本語教師は学生との教室での会話の中(あるいは教室外でも)では「きのう、どうして休みましたか」と質問していると考えられるからである。これは、既習の日本語を使おうとする姿勢からくるものと、教える側の日本語に対する感覚の麻痺(これは Teacher Talk の弊害の一つと思われる)からくるものがあると思われるが、問題は学習者が不自然な用法を不自然と感じるか感じないかではなく、不自然な用法に触れさせないことが重要ではないだろうか。

特に、「話しことば」を中心とした初級の日本語学習においては、不自然さを伴った表現は使うべきではないのではないか。

次に、導入方法であるが、たとえば(15),(16)の場合、ここでの導入事項は「も」であるから、「あした へ行きますか」の場所を数ヶ所羅列して、そのあとで全部を否定する用法「も(どこへも行きません)」を導入すれば不自然さはなくなる。さらに、それと相対して

- (20) A : 銀行へ行くんですか。
B : いいえ、行きません。
A : 郵便局へ行くんですか。
B : いいえ、行きません。
A : どこへ行くんですか。
B : どこへも行きません。

を提示して、これら2つの会話に違いがあることだけを伝える。ここで「～んです」の前提条件や用法についての説明は不要であろう。

このように、意味を理解させるというよりは、むしろ必要な場面に応じて「～んです」を使うべきではないであろうか。「ます形」に慣らされた学習者に「～んです」の用法が不自然なものとして感じられる感覚を持たせないためにも、この用法に耳慣れさせることがよいのではないか。そして、「どうして」の導入に伴い「～んです」のパターン・プラクティスなどで、この用法をあらためて発話に取り入れるのがよいのではないだろうか。

さらにつけ加えるならば、動詞の「辞書形」は「ます形」と平行して覚えさせるべきである。「辞書形」は辞書を引くためには必要な形であり、「辞書形」をもった用法も多い。

一般に外国語学習の初期の段階では、統語構造の型の指導が重視されるが、学習の極めて早い段階から、構造型の運用(つまり、語用論的視点)に十分注意すべきではないかと思われる。

<参考文献>

- 新屋 映子．『日本語教科書の落とし穴』 株式会社アルク．1999．
工藤 浩他．『日本語要説』 ひつじ書房．1993．
藤田 直也．『日本語文法 学習者によくわかる教え方』 株式会社アルク．2000．
松岡 弘他．『日本語文法ハンドブック』 株式会社スリーイーネットワーク．2000．
森田 良行．『日本語文法の発想』 ひつじ書房．2002．